

— インパルスに携わるようになったきっかけは？

鹿野 2011年のシーズンオフにインパルスがソーシャルメディアで発信したスタッフ募集に応募しました。「必要なのはただ一つ、インパルスへの熱い思い」というキャッチコピーに突き動かされました。

スタッフとしての参加は2012年からですが、妻の弟がインパルスでプレーをしていたので、長年インパルスを応援していました。義弟が引退してからもビッグゲームは家族で観戦に行くなど、ファンとしてインパルスの応援は続けていました。数年前、ファンの中から抽選で1組がインパルスの選手と一緒にフィールドで写真撮影ができるという企画に応募し、インパルスへの思いや、一緒に写真を撮りたい選手への思いを綴ったのですが、それが、「ファンのレベルを越えている」と、異哲夫ディレクターの目にとまっていたようです。以来、異ディレクターをはじめ、チームの方々とも親しくさせていただくようになっていきました。

— ジュニアインパルス創設の経緯は？

鹿野 社外スタッフとして試合時の受付などをお手伝いさせていただくと同時に、「この面白いスポーツを子どもたちに伝え、裾野を広げていく活動がこの先必要になる」という話を普段から異ディレクターや、チームスタッフの佐村敬さんとしていたことから、ジュニアインパルス創設の構想がはじまりました。



鹿野 英樹
 しかの・ひでき。長年インパルスをファンとして応援していたが、2012年から社外スタッフとして運営に参加。主に試合会場でパナソニック社員向けの受付を担当。同時に少年フットボールチームの創設に携わり、2017年の創部と同時に監督に就任。株式会社鹿野木材社長

Hideki Shikano

実際に立ち上げるには、安全面をどう担保するかなど、調整しなければならぬことがたくさんあり、すべてをクリアするには数年かかりました。インパルスの荒木延祥監督、四方哲郎部長にも相談に乗っていただき、最終的にインパルスの社会貢献・地域貢献活動の一環として、インパルスが活動を支援するジュニアチームとして立ち上げることができました。

荒木監督にはジュニアチームの顧問をしていただいています。2017年の第1期生は小中学生合わせて7名。当時中学3年だった私の長男はチエスナットリーグに所属する他のチームでプレーしていました。小さい頃からインパルスを応援していて、私以上に

インパルスに対する思いを持っていたので、移籍して主将として参加してくれました。

最初の1年間は試合ができませんでした。しかし、年々参加希望者が増え、現在は小中学生合わせて60名程が参加しています。卒部の多くは高校でもフットボールを続けてくれています。1期生は今年、高校を卒業して大学に進学します。

卒部した後も後輩たちの練習を見に来て、高校の話や中学時代に気づけなかったことなどを現在のメンバーに話してくれるOBもいます。卒部した後もジュニアインパルスにかえって来てくれることはとても嬉しいことです。

卒部した子供たちが高校、大学



体験入部者を案内する鹿野監督

「ための基本を、フットボールを通じて教えることを一番大切にしています。」

特に中学生には「大学がゴールではない」と常々言っています。社会に出て、どうやって社会に役立つ人間になるのか、という家庭をつくるのかをしっかりと勉強してほしいと伝えています。

— インパルスとの連携や交流はどのように行っていますか？

鹿野 ジュニアインパルスの練習は、土曜日にインパルスの練習が終わった後、同じフィールドで行っています。インパルスの選手たちが練習後にウエイトトレーニング場でトレーニングをしている中で子供たちが集まってきました。練習後も成長しようと頑張っている大人の姿を子どもたちが自然と目に

することは、教育的にもとてもいいと思っています。昨年はコロナの影響であって触れ合える環境は作らなかったのですが、一昨年末では練習が重なっていないときはインパルスの招待で試合の応援にも行かせていただき、コイントスに参加させてもらうなど、親密な関係を保っています。

また、ジュニアインパルスのコーチングスタッフは、全員インパルスのOBにお願いしています。Xリーグでもトップレベルにあるインパルスの正しい技術を子どもたちに教えてもらえることは、安全性を担保するという観点から大きなメリットになっています。私はアメリカンフットボール経験者ではありませんので、先に述べた姿勢や考え方を伝えることに重きを

を置いて指導しています。

数年前から門真市や守口市の中学校の授業支援として、インパルスの選手たちがフラッグフットボールの指導を行っているのですが、そこでインパルスの選手のファンになり、ジュニアインパルスでプレーしたいと入部してくれた子もいます。

— 鹿野さんはジュニアインパルスの活動にどんな価値を感じていますか？

鹿野 子どもたちと接することが日々勉強になっています。特に中学生は思春期という難しい時期なので、一方的に伝えたいことを話すのではなく、いかに心に響かせるかを大切にしています。伝えたいことは一つですが、コーチ陣がそれぞれ違う角度でアプローチすることを心がけています。実際、コーチの方々の子どもたちへの接し方を見て、一人の父親としてとても勉強になっています。子どもたちを指導する立場として、自らを律しなければならぬという、いい意味での緊張感ももっています。

また、保護者の方から、学校生活にうまく馴染めなかった子が、ジュニアインパルスに参加して改善したという話も聞くことができました。学校とは違った形で、子どもたちの成長を助けることができる活動なんだと実感できたことも、私にとっては大きな価値です。

— ファンの立場から運営側にまわってチームのイメージは変わりましたか？

鹿野 応援してくださいって社員の方々の思い、ファンの方々の思いをより強く感じるようになりました。また、インパルスの選手

はもちろん、荒木監督をはじめ

コーチ陣・スタッフの皆さん一人ひとりが厳しく自己管理しながら日本一を目指すストイックさをより強く感じるようになりました。

そういう文化を持ったチームのジュニアチームですから、その部分はぶれないようにしたいと思っています。フットボールだけでなく、当たり前のことを徹底的にやることをジュニアインパルスの子どもたちにも教えたいと思っています。

— インパルスのサポートスタッフ、ジュニアインパルスの監督、それぞれの目標は？

鹿野 インパルスのサポートスタッフとしては、日本一奪取に貢献することです。ジュニアインパルスの監督としては、小学生チームには、フットボールを好きになってもらうことを第一の目標にしています。中学生には選手一人ひとりの思いや意志をひとつにして勝利する喜びを味わってもらいたい。これはインパルスの理念にもつながっていくことだとも思っています。

— 私自身も、それが実現できる指導者になるために日々模索し、勉強していきます。



I'm 私 **IMPULSE** 私はインパルス

アメリカンフットボールは専門的な役割を持った人々が集まって勝利を目指すスポーツだ。チームが組織として機能するためには、様々な役割を担う人々の存在が不可欠である。社会人Xリーグの強豪、パナソニックインパルスを支える人々はどんな意欲を持ってチームに携わっているのか。今回は社外スタッフとして試合時のサポートと、2017年に創部した少年フットボールチーム「ジュニアインパルス」の監督を務めている鹿野英樹さんに、活動に込めた思いを聞いた。